

定期考査を問う



第704号
デジタル
ダイジェスト版
発行元
長野県
長野高校
新聞部

廣田昌彦学校長

時代に合わせ改善を

長高新聞704号で企画された特集「定期考査を問う」に掲載された記事の中から2つを厳選し、掲載します。全文をお読みになりたい方は、6月に開催される本校の文化祭でお買い求めください。



神聖なるピアノの横に立つ廣田先生

定期考査は多くの生徒にとって学習の節目であるが、その意義や負担については議論が続いている。新聞部は本校校長（当時）の廣田昌彦先生にメールで取材を行い、本校の定期考査に対する考えを聞いた。

本校では、一定期間の学習内容の復習による知識・技能の定着に加え、思考力・判断力・表現力の評価、さらには計画的な学習を通じて主体的態度の育成など、幅広い目的のもとに定期考査を実施している。

メリットとしては、班活動を停止して学習に集中できる環境が整うことや、教員が評価に専念し学年全体の学習傾向を把握できる点を挙げた。一方で、得意科目に学習が偏り不得意科目が疎かになってしまふことなどを踏まえ、教科間格差が広がる可能性が課題であるという。

こうした問題に対応するため、本校では考査の回数や一回ごとの

部説

定期考査は何を測るか

定期テストは学力を測る手段とされるが、その実態は短期的な暗記力や出題形式への適応力の測定に偏っている。

生徒は範囲内を一時的に詰め込み、試験後に忘れる循環に組み込まれ、深い理解や問い続ける姿勢は十分に育まれていない。テストは学びを区切り、知識を断片化し、「出ない

ものは学ばない」という意識を強化する。また、高得点であっても内容を説明できない例が示すように、点数と理解の乖離も顕著である。

こうした状況は、学校が測定しやすい能力のみを学力とみなしてきた可能性を示唆する。さらに、評価制度は学習の方向そのものを規定し、何を考えなくて

よいかまで決めてしまふ力を持つ。ゆえに問うべきはテストの存廃ではなく、学校が何を価値ある学びと認めるのかという根本である。

定期テストが測っているものは何か。そして、測られていないものは何か。教師や学校だけでなく、当事者である私たち学生がその空白に目を向け、学校教育に対して声を上げることからしか、新しい教育は始まらない。

（要旨）

スキー・スノボ教室

1年生は1月22～23日に志賀高原スキー場にて実施されたスキー・スノーボード教室に

参加した。大寒波が予想された多くの生徒に心配されながらも無事に行われた。

初日は班ごとに分かれて実習を開始し、初対面同士でも協力しながら滑走した。雪の中の活動となり転倒する場面も見られたが、徐々に慣れていく様子が見られた。レクリエーションなどを通じて、宿泊先でも交流を深めた。

2日目は快晴のもと実習を行い、技術の向上に伴い急斜面にも挑戦する姿が見られた。

（要旨）



爽快に滑る

長高新聞は1948年に創刊された長野高校の誇る歴史ある学校新聞です。発行号数は長い間日本一であり続けました。現在は年に6～7号の頻度でタブロイド判の本紙を、行事ごとにA4判の速報紙を発行しています。過去1年分のバックナンバー及び縮刷版は本校文化祭にて一般販売を行っております。